

桜美林大学に伝わる思想や理念

桜美林大学の特性は、創立者である清水安三先生の教育思想を土台として、長い歴史の中で定着してきた。建学の理念を一般的な言葉で表すと、「キリスト教精神に基づく国際的人材の育成」であるが、その根幹となる考え方を、清水先生の実際の言葉を引用しながら以下に記す。これらの思想がバックボーンとなり、その実践の形が大学の教育研究の特徴となっている。

（１）石ころの教育～教育の力を信じる桜美林～

新約聖書に次のような言葉がある。「言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」（マタイによる福音書 3 章 9 節）。清水先生はこの句を教育にも応用し、自著である「石ころの生涯」という本の中で、次のように述べている。「私が手塩にかけるといかなる低能な頭の悪い生徒も、たちまちにして優等生にまで向上する。私自身は実に頭の悪い男である。しかし私が教えると、皆優等生になるのだから面白い。」すなわち、どのような学生であっても教育によって一人前に育てられるという力強い信念が桜美林にはある。

（２）３H主義：Heart, Head, and Hand

桜美林の前身である「崇貞学園」の時代は、３Hという教育理念があった。第一はHeartで、心の教育を説く。第二はHeadで、思考の教育を説く。そして最後はHandで、実践や実習の教育を説く。特に、実際から理論へと考えるプロセスを重視した教育が行われていた。教室内の座学だけではなく、世界の至る所をキャンパスとし、実践・実習の中から課題を発見し、物事の動かし方を学び、人とのコミュニケーションを修得し、理論に還元する方法は、現在の桜美林における学び方でもある。

（３）学而事人（がく・じ・じ・じん）～学びて人に事える～（注：事える＝つかえる）

「学而事人」は、大学のモットーである。清水先生は次のように述べている。「学問のために学問してもよい。自己の教養のために学問してもよい。しかし、我々は、人に事えんために学問するのである。あらゆる方面に学而事人で行けば社会は改造し得るのである」。ひとりひとりの人間が、それぞれ学んだことを他者のために、社会のために還元できれば、豊かな社会が構築できるという考え方である。一人の学而事人は小さくても、賛同して多くの人間が学而事人

を実行すれば、結果として平和で豊かな世界になる。学而事人は桜美林の学生や教職員が共有する価値である。

（４）人間はみな同じ神の子～国や民族で差別のない学園～

清水先生は自ら中国、韓国、アメリカ等を訪問、滞在し、また、働き、学ぶ中から、全ての人間が平等に、公平に、仲良く平和的に共存する世界を追求した。学園を設立する際も、「民族の差別なく中国人、日本人、韓国人が仲良く勉強できる学園を創る。人間はみな同じ神の子なのだ」と説いた。また、その教育についても、「真に日本民族の発展を願う者は国際的精神を所有せねばならない。日本の教育をもっと世界的なものに解放して、世界の人間を育てることに改めるがよい」とまで述べている。まさに我々が今議論している「グローバル教育」を、その当時から謳っていたのである。

（５）ホーム・ライク・スクール

清水先生は、「学園はひとつの大家庭である。いかなる場合であっても互いに愛し合うこと、親切は桜美林の学風である」と述べている。これはキリスト教の隣人愛に基づくもので、「自分を愛するように隣人を愛すること。全人類が兄弟姉妹として相睦み、相愛して生活する」という教えが土台となっている。ホーム・ライク・スクールという言い方は現在の桜美林でも頻繁に使われるフレーズで、家族のような学校として学生や保護者にも認識されるように努めている。

（６）夢を見よ～開拓者、先駆者の精神～

世の中がもっと良くなることを望み、課題を発見し、夢を見て、新たな価値創造や新しい形を生み出すべく、何事にも果敢に取り組む文化が桜美林には根付いている。これを支えているのは信仰である。ヘブル書11章によると、「開拓者、先駆者に最も必要なるものは信仰である」とされ、「未だ見ざるものを真実とする所に信仰があるのである」と説かれている。清水先生は強い信仰のもと、さまざまな夢を実現された人物であったが、次のような言葉を残している。

「我が輩の死後、長い歴史において桜美林学園そのものが難関にぶつかり、大いなる危機に立つこともあるであろう。その時諸君に復活の信仰があるかないかによって、学園はペチャンコになるか、それとも試練によっていっそう躍進するかが決まるであろう。」桜美林には、このような開拓者スピリットが受け継がれている。

（７）プロビデンスとリーダーシップ

清水先生は学園の経営方針として次のように述べられている。「プロビデンスを摂理と中国人は訳した。摂という語は助けという意ではあるが、プロビデンスなる語の訳語としては、むしろ、先見という語の方がベターかと考える。人間が悲運に出くわした時には絶望もするが、ずっと後になって回顧する時に、あの時の悲運があったからこそ今日の自分があるのだ、といて、神の摂理を今更のように神に感謝することが往々にしてあるものだ。それをすなわちプロビデンスの信仰というのである。クリスチャンスクールの経営方針の特徴は、経営者が事に直面した時に、イエスキリストが校長だったならば、いかに処理するであろうかと考え、それに従い、断固、行っていくことである。」長期的な展望のもと、正しく良い事と思われることは、強い信念のもとで断行していく勇気が語られているが、桜美林の経営陣も、このような文化を受け継いでおり、強いリーダーシップを発揮し、さまざまな改革改善を行ってきた。

以上